

# 復活劇に重ねる祈り

3月11日、鎮魂の「能と文楽」

能楽師は、芸を磨くだけでは己を全うしていると言えない。観世流宗家の観世清河寿はそう考える。「先達は国難のたびに勧進能で復興資金を集め、芸で人心を慰めた。この根本があつてこそ今日の能も成り立つ」。東日本大震災から3年の3月11日、文楽の豊竹英大夫と共に、キリスト教に題材を得た鎮魂の公演「能と文楽」を東京・松濤の観世能楽堂で上演する。

能「聖パウロの回心」は一昨年初演。台本の林望と練り直し、清河寿が初演のキリストに加え、前シテでパウロも務める。「一人で異なる人格を演じる能の特性が強まった」と清河寿。面は中将だが心は「翁」と定め、身を潔斎して舞台に臨む。「死者を弔い未来を祈る。翁同様、キリストの存在もそれ自体が文化ですから、精神の贅肉をそぎ落とし、限界まで研ぎ澄ま

## 死者を弔い、未来を祈る翁の心で

さねば演じられない」。売り上げ全額を寄付してきた義捐能に続き、収益の一部を被災地に寄付する。「できることはわずかだが、積み重ねが先達の志に通じるところです」

元旦、舞台名を本名の清和から改めた。昨夏の母急逝を機に、やはり急逝した父左近と祖父の先代左近を思い、その人を表す名前と命について考えた結果だ。

2016年秋には観世能楽堂の銀座への移転も控える。「吉祥の字面に寿命全うの祈りを込めた。やるべきことは山積ですから」

一方の「ゴスペル・イン・文楽」は、英大夫が1991年から上演を重ねる。能舞台での文楽は異例で、観世能楽堂では初めてだ。

鶴沢清友のずしりと響く三味線でハッとマリアは気も動転——。義太夫節で語るゴスペル(福音)の背後には医療過誤により5歳で失った娘への哀惜がある。

「殺したいほど」医者をも憎んだ。だが救いを求めた教会で「赦し」を説く話を聞き、悩む己の卑小さを思い、人はみな不完全な存在だと痛感した。「赦そう、と。本心じゃなかった、そこまで人間ができてない。だが言葉に出すと、すっと楽になった」

復活劇に不滅の魂への祈りを重ね、阪神大震災の被災地でも演じた。「苦しみ悲しみにこわばる心も、何かが琴線にふれて感動でき

れば、生の実感が湧き、みずみずしさを取り戻す。芸能の役割やと思います」

キリストは桐竹勘十郎が俊寛の首で遣う。「平家女護島」で俊寛は流刑の島から戻る船の席を譲り、ひとり残るが「岸壁で船を見送る俊寛の姿は、ゴルゴタの丘で十字架を背負うキリストの姿に重なる」と語る。

公演は午後1時と6時。1万5千〜8千円。能には野村萬斎も出演。解説と林望の「お話」も。03・3469・5241(能楽堂)。(西本ゆか)



河寿=郭允撮影



パウロの回心」  
浅勝氏撮影



「ゴスペル・イン・文楽」  
©CHOSOKAWAFUJIMASA